

特別支援教育部会（小学校）

県研究主題

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案 1

提案者 伊藤 セリサ（横浜地区）

1 提案内容

コミュニケーションに課題をもつ児童は、大きな集団の中で主体的に活動したり、相手を意識

<研究主題>

相手意識を持ち、主体的に活動に取り組む力を育てる単元づくり

ー近隣小学校の特別支援学級との交流を通してー

して行動したりすることに難しさを感じることが多い。そこで、行事と関連させ、近隣校の特別支援学級との交流を柱とした単元を設定することで、児童が主体的に活動したり、相手を意識して行動したりする力を育てることができると考え実践した。

(1) テーマに迫るための手立て

①単元を通じた継続的な交流

- ・ 宿泊学習前後の手紙のやりとりや、宿泊学習練習などの交流を、ねらいをもって計画的に行う。
- ・ 手紙のやりとりやゲームの計画などを通して、他者意識をもたせる。やりとりした手紙を掲示したり、行事で使用する名札を継続して使ったりするなど、児童が他者意識をもち続けるための工夫をする。
- ・ ゲームは、交流校の児童を想定して計画を立てさせたり、混合チームで行ったりする。

②行事・教科との関連付け

- ・ 区合同宿泊学習を柱として、児童がより主体的に活動できるような単元構成にする。
- ・ 他者との関わりを意識した集団での指導や、国語科の目標を達成するための個別学習などねらいにあわせた指導形態を工夫する。

③担任同士の情報交換

- ・ 区の研究会を利用して、他校との連携をしていく。

(2) 評価～児童の変容から～

区合同宿泊学習に対して不安感をもっていた児童は、単元の前半に担任が近くにおいて思いを聞き取るようにしたことで、単元途中には自分から発言することができるようになり、宿泊学習当日は大きな声で自分の思いを伝えることができるようになった。また、事前学習での交流で近隣校に友だちができたことで、安心感をもって宿泊学習を楽しむことができた。

集団の場で自分の思いを優先してしまうことの多い児童も、交流時のゲーム計画の場面で、自分の得意なゲームから交流校の児童ができるゲームへと選択を変えることができた。また、交流校の児童が決めたゲームで、負けてしまっても、怒ったり途中でやめたりせず、最後まで取り組むことができた。

(3) 成果と課題

①単元を通じた継続的な交流

交流を重ねることで、相手の理解が深まり仲間意識が芽生える。それにより、また交流したいという意欲の高まりにつながり、児童が主体的に活動することができるようになった。

②行事・教科との関連付け

毎年行っている宿泊学習と関連付けることで、宿泊学習に対しての意欲を高めることができた。また宿泊学習に対して不安感をもつ児童は、宿泊学習の前に友だちができることで、安心感をもって参加することができた。

③担任同士の情報交換

研究会や中学校ブロックでの話し合いなどの場を活用して交流を行うことができた。効果的な交流のためには、お互いの学校の児童の様子や、この活動で伸ばしたい力を担任同士で共通理解しておくことが大切であった。

2 協議内容

グループ協議では、「他者意識を育てるための教育活動の工夫」を柱に協議した。

(1) 各校の実践の様子

- ・宿泊学習では、調理・歩行・避難・グループ活動などを取り入れている。
- ・他者意識を育てるために、学校での児童の役割を明確にしている。
- ・中学校ブロックでの交流を行うことで、進級・進学後の見通しをもてる。
- ・会のネーミングが児童の意識を高めることに効果的に働く。

(2) 課題

- ・支援級だけで行う行事では、保護者に「何のために行うのか」「児童のどんな力を育てるための活動なのか」を理解してもらうことが大切。
- ・支援級から交流級への働きかけが必要。
- ・児童の意欲の高まりに応じて、自発的な会につなげていくことが大切。

3 まとめ

(1) 近隣校との連携について

本実践は、区の研究会で担任同士が定期的な連絡を取れるというチャンスを利用して単元構想がされている。効果的な交流を行うためには、常に担任のアンテナを高くしておくことが大切。

(2) 行事と教科の関連付けについて

国語科と関連付けた「手紙を書く」という学習では、交流校の児童に思いを伝えるという目標から相手意識をもたせることができた。単元を構成する際には、その場の学習で終わらず、児童の意欲を引き出し、生活に生かす取組をすることが大切である。

(3) 自立活動について

自立活動の指導は、「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うため、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする」とある。（特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 p27）本実践では、自立活動の内容6区分26項目がほぼ網羅されている。集団での学習を計画する際は、この項目を意識して計画すると、学びが深まる。

自立活動において、コミュニケーションについて学ぶ際にはいろいろな手立てがあるが、必ずしも集団であればよいというわけではない。児童の実態やねらいにあわせて、個別の学習が

必要な場合もある。

提案 2

提案者 岩崎 敦子（県央地区）

<研究主題>

自己肯定感を支えるために
ー身体とことばの指導ー

1 提案内容

海老名市には、ことばの教室が2校あり、児童は、構音障害、吃音、言語発達遅滞、難聴など様々な困難を軽減するために通級している。各児童の身体やことばの実態を捉えながら、個に応じた指導を行う中で、自己肯定感を低めることのないように配慮していくことの大切さを実感するようになった。そこで、発達上の様々な課題を抱えているが、どんな活動にも前向きに取り組む本児の実態を捉え、できたことを実感できるようにすることで自己肯定感を支えていきたいと考え、本テーマを設定した。

(1) テーマに迫る手立て

- ①本児や保護者、担任の思いを受け止め、実態を明らかにし、ニーズを捉える。
- ②専門機関と連携し、本児に必要な支援を探り、担任や保護者と共有する。
- ③実態に即した教材を工夫する。

(2) 実践について

- ①保護者や在籍学級担任から本児のよいところや気になるところ、主訴を聞いた。また保護者からは、本児の生育歴・社会歴・検査歴などを聞き、本児へのアセスメントを基に個別の指導計画を作成した。

- ②ア 作業療法士との連携（事例報告への指導・助言、研修会の講師、本児への指導・助言相談）

イ 言語聴覚士との連携（事例報告への指導・助言、研修会の講師、保護者との交流、在籍級の授業参観、在籍級担任の研修会参加）

- ※①、②から見えてきた本児のもつ強みと課題を基に長期目標と指導方針を立てた。

③ア 指示理解を高める指導

- ・得意なこと活用 お使いゲーム（聞いて理解、読んで理解）
旗揚げ（聞いて行動、耳と手の協応）
- ・在籍級での課題対応 仲間結び（カテゴリーの理解）
迷路、点つなぎ、折り紙（手と目の対応、上下左右理解）
クロスワードパズル（様々なカテゴリーの語彙理解）
- ・遊びのルール理解と語彙拡大 ぼうずめくり（ゲームのルールの理解）
いきものはかせ（形の認識力、集中力）
絵カードめくり（理解できたカードでカテゴリー分類、日常的に使われる言葉の習得）
- ・好きなことの活用 新幹線すごろく（興味をもって取り組む）
- ・気持ちを伝えやすくするために 表情カードとそれに合った言葉

イ 指示理解と身体感覚を養う粗大運動の指導

- ・粗大運動（身体の各感覚器から脳の刺激を受け自分自身の認識力を高める）
- ・感覚統合運動（感覚刺激を受け取ることで毎日の生活をスムーズにする）
- ・体幹トレーニング

ウ 口腔機能を高める構音・発声の指導

- ・構音練習 舌のトレーニング、口の体操
- ・身体リズム運動

(3) 成果と課題

できること、分かることが増え、コミュニケーション能力も伸び、クラスでの生活を楽しむことができた。自分・友達・関わる大人への肯定感も高く保たれている。今後は、他の児童の本児への関わり方・見方の変化、本児の自我意識の変化、学習内容の抽象化などに対して、いかに自己肯定感を高く保っていけるか、その手立てを課題とし、保護者、担任、専門機関との協働を続けていきたい。

2 協議内容

グループ協議では、『『わかる、できる』ことによる、自己肯定感を支えるための工夫』を柱に話し合いを行った。

(1) この提案に関する参考になった点

専門家に的確な助言をいただいたことで、よりポイントに迫る支援ができていた。専門機関と連携をとることの大切を感じた。また、身体を動かすことの重要性がよくわかった。粗大運動は、全ての土台となる。粗大運動ができた上での微細運動だ。

(2) 「自己肯定感を支えるための工夫」について、各校で取り組んでいること

- ・スモールステップで取り組み、「できた！」という成功体験を積み重ねる。
- ・他者からの評価（認めてもらうこと）が得られる場を設定する。
- ・少数グループでの活動で、リーダーとして活躍する機会をつくる。

3 まとめ

(1) 提案の効果的な支援

時代の求めに合ったテーマを取り上げ、実態把握を丁寧にして、児童・保護者の思いを大切にしながら実践していた。「できた！」が実感できるように、細かいステップを踏んで指導をすることや、遊び感覚や本児がもつ強みを活かした教材を工夫したこと、教員が積極的に専門機関と連携をすることで、本児の発達をうまく支援していた。

(2) 課題への思い

吃音を改善していくには、学校だけではなく日常生活の中で話す場面を意識的に作っていくようし、本人が伝えようとする気持ちを大切にして、声かけをするとよい。「他の児童との関わり方・見方の変化」については、「誰にでも困ることはあるね」ということを共有させていき、在籍級担任や通級担任が関わり方の手本となって、本児の気持ちを正しく伝えるなどしていくとよい。